

校異源氏物語・かゝり火

このころ世の人のことくさに内のおほいとのゝいまひめ君とことにふれつゝい
ひちらすを源氏のおとゝきこしめしてともあれかくもあれ人みるましくてこも
りゐたらむ女こをなをさりのかことにてもさはかりにものめかしいてゝかく人
にみせいひつたへらるゝこそ心えぬことなれいときはくしうものし給ふあま
りにふかき心をもたつねすもていてゝ心にもかなはねはかくはしたなきなるへ
しよろつの事もてなしからにこそなたらかなるものなめれといとおしかり給ふ
かゝるにつけてもけによくこそとおやときこえなからもとしころの御心をしり
きこえすなれたてまつらましにはちかましきことやあらまじとたいのひめ君お
ほししるを右近もいとよくきこえしらせけりにくき御心こそゝひたれとさりと
て御心のまゝにをしたちてなともてなし給はすいとゝふかき御心のみまさり給
へはやうくなつかしうゝちとけきこえ給ふ秋になりぬはつかせずゝしくふき
いてゝせこか衣もうらさひしき心ちしたまふにしのひかねつゝいとしはくわ
たり給ておはしましくらし御ことなともならはしきこえ給ふ五六日の夕つく夜
はとくいりてすこしくもかくるゝけしきおきのをともやうくあはれなる程に
なりにつけり御ことをまくらにてもろともこそひふし給へりかゝるたくひあらむ
やとうちなけきかちにて夜ふかし給ふも人のとかめたてまつらむ事をおほせは
わたり給ひなむとて御まへのかゝり火のすこしきえかたなるを御ともなる右近
のたいふをめしてともしつけさせ給ふいとすゝしけなるやり水のほとりにけし
きことにひろこりふしたるまゆみの木のしたにうちまつおとろくしからぬほ
とにをきてさしゝりそきてともしたれば御前のかたはいとすゝしくおかしきほ
となるひかりに女の御さまみるにかひあり御くしのてあたりなといとひやゝか
にあてはかなる心ちしてうちとけぬさまにものをつゝましとおほしたるけしき
いとらうたけなりかへりうくおほしやすらふたえす人さふらひてともしつけよ
なつの月なきほとはにはのひかりなきいとものむつかしくおほつかなしやとの
たまふ

かゝり火にたちそふこひのけふりこそよにはたえせぬほのをなりけれいつ
まてとかやふすふるならてもくるしきしたもえなりけりときこえ給ふ女君あや

しのありさまやおほすに

行ふなき空にけちてよかゝり火のたよりにたくふけふりとならはひとのあ

やしとおもひ侍らむことゝわひたまへはくはやとていて給ふにひんかしのたいのかたにおもしろきふえのねさうにふきあはせたり中將のれいのあたりはなれぬとちあそふにそあなる頭中將にこそあなれいとわさともふきなるねかなとてたちとまり給ふ御せうそこゝなたになむいとかけすゝしきかゝり火にとゝめられてものするとのたまへれはうちつれて三人まいり給へりかせのをと秋になりけりときこえつるふえのねにしのはれてなむとて御ことひきいてゝなつかしきほとにひき給ふ源中將はゝむしきてうにいとおもしろくふきたり頭中將心つかひしていたしたてかたうすをそしとあれは弁少將ひやうしうちいてゝしのひやかにうたふこゑすゝ虫にまかひたりふたかへりはかりうたはせ給て御ことは中將にゆつらせ給つけにかのちゝおとゝの御つまをとにおさゝおとらすはなやかにおもしろしみすのうちのものゝねきゝわく人ものし給らんかしこよひはさかつきなと心してをさかりすきたる人はゑひなきのついてにしのはぬこともこそとのたまへはひめ君もけにあはれときゝたまふたえせぬなかの御契をろかなるましきものなれはにやこの君たちを人しれすめにもみゝにもとゝめ給へとかけてきたに思ひよらす此中將は心のかきりつくして思ふすちにそかゝるついてもえしのひはつましき心ちすれとさまよくもてなしておさゝこゝろとけてもかきわたさす